

アメリカン大学教授・本学国際共同研究センター学術顧問  
趙全勝先生が本学来訪

11月26～30日、本学国際共同研究センターの学術顧問・アメリカン大学の趙全勝教授が本学にお越しいただき、本学の学生に対して講義を行い、国際共同研究センターの研究者と学術懇談会を開催しました。



27日に法学部と経営学部220人以上の学生に対し、「中国経済改革開放の政治経済学」と題した学術講演を行いました。講演の中で趙教授は、世界には資本主義の市場経済モデルと社会主義の計画経済モデルだけではなく、市場経済と計画経済の要素を包容し、計画経済から市場経済へシフトする「移行型経済モデル」という第三のモデルも存在するとし、中国の改革開放はまさにこの第三経済モデルの代表例であると指摘しました。そして、先生は、中国の改革開放は中国独自のものではなく、戦後日本が採用してきた行政指導型市場経済を特徴とする国家発展モデルに遡ることができると唱え、日本はそのような経済モデルを採用したため、いち早く先進国となり、その後「アジアの四小虎（韓国、シンガポール、香港、中国の台湾）」も日本の経験に学び、先進国・地域へと発展したという歴史的経緯を説明した上に、中国も基本的に日本のモデルを継承し、東アジア地域で特有の雁行発展モデル（雁行形態論）を形成し、しかも、現在、中国は日本の代わりに、アジア経済をけん引し移行型経済モデルを維持しつつも、グローバルバリューチェーンにおける優位性の確立と地域の

経済統合の推進に努め、改革とイノベーションを引続き推進いくであろうという予測を述べられました。

28日、趙全勝先生はまた、法学部と経営学部の100人を超える留学生に対し、「米中日三国における戦略関係の現状と展望」をテーマに講演を行いました。

先生はまず、日本の高市早苗首相が最近、国会答弁で「台湾有事は日本有事」、日本の存立状態として自衛隊による武力干渉を示唆した発言を切り口にして、東京、北京、ワシントン三者が現在、東アジア安全保障構造における戦略的思考について分析しました。先生は、日本側から見ると、日本国内政治の右傾化、経済発展の停滞、少子高齢化などの内政的要因によって日本の外交の強硬化が後押しされ、高市内閣が打ち出した非核三原則の見直し、憲法改正、台湾統一問題に対する強硬な発言がその現れではないかと述べられました。

続いて彼は日本の戦略は、日米同盟を基軸とし、米国の力で中国を牽制・均衡させながら、経済貿易においてはRCEPなど地域の経済協力に積極的に関与していると分析しました。中国について先生は毛沢東、鄧小平、習近平にわたる三つの時代の戦略的目標を切り口にして、中国の対日関係の歴史的な位置づけと現実的な挑戦にメスを入れ、台湾問題が中国の戦略において核心的な地位を占めていると強調したうえで、高市首相の対中内政干渉政策に対して、中国は観光客の日本渡航の自粛勧告、琉球の地位問題、魚釣島（尖閣諸島）といった経済、外交、領土問題及び世論などの面で対抗措置を取り、世界から注目を浴びていると指摘しました。

最後に、彼は米中日三角構造の中で、日本は米中両国に引き付けられようとする肝心な位置にあり、三国関係は競争しあう関係が含まれていながら、出方次第で協力の可能性も存在するとし、今後、いかに誤った判断を回避し、相互に信頼しあう関係が再構築されることができるかが、東アジア地域の安定が保てるかの決定的な要因であろうと結びました。

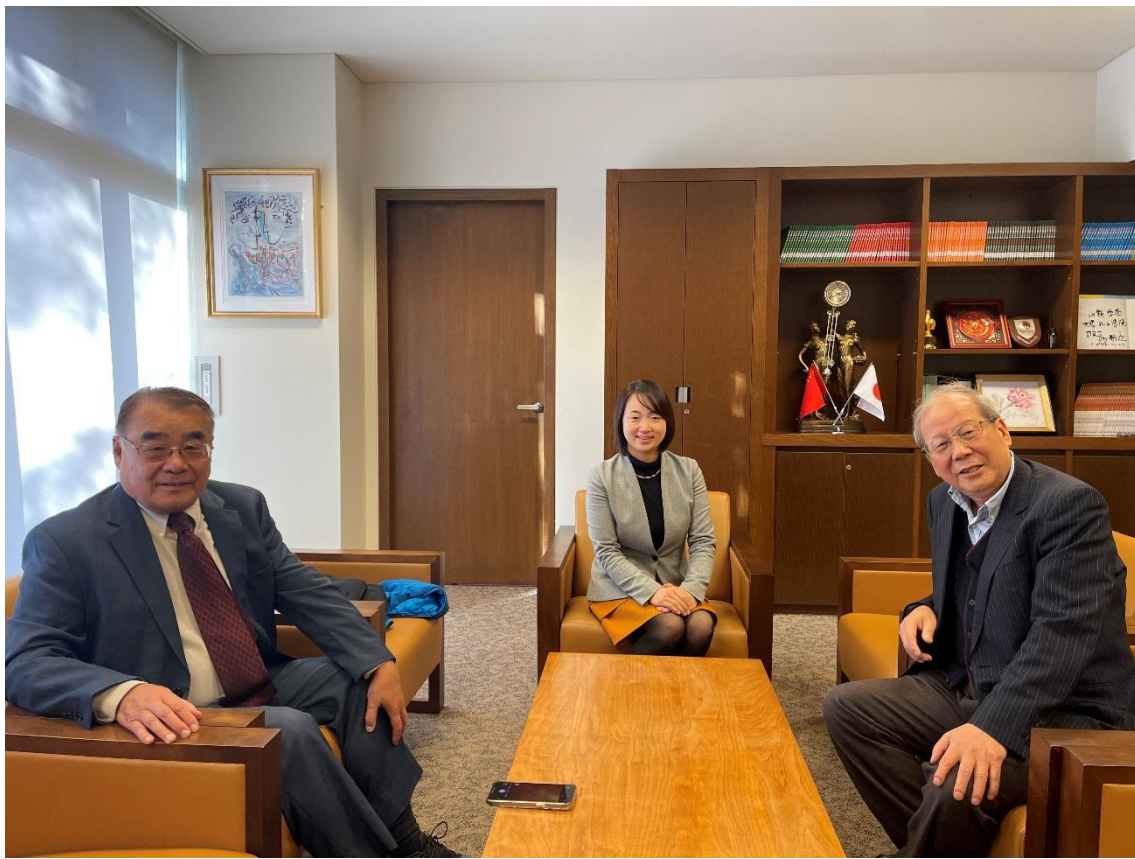


学生に対し上記の講演を行う以外に、国際共同研究センターの연구원たちと一部の大学院生と學術懇談会を開催しました。懇談会の冒頭、趙先生は高市首相の国会答弁によって引き起こした中日外交の紛糾について、中国の王毅外交部長の発言を引用し、今回の高市早苗氏の発言には「初めて台湾介入に明確に言及した、初めて武力という言葉が使われた、初めて中国を武力で脅かした」と問題の深刻さを指摘し、アメリカの反応としてトランプ大統領が中国の習近平国家主席、日本の高市早苗首相と相前後電話会談を行ったことについて、中米の緊張関係が幾分緩和された現状を変えたくなく、中日両国の争いに巻き込まれたくないのではないと動機を分析されました。また、トランプ大統領が打ち出した G2 説について、中国側により明確に受け入れられなかったが、多くの人により使い始めたとして、中国に対するアメリカの姿勢に変化の兆しが見え隠れしていると唱えました。

席上、名古屋外国語大学名誉教授、東海地方日中関係学会理事長の川村範行先生から当学会が日本の総理大臣、外務大臣、官房長官および日本駐在中国大使宛に送付した、両国の険しい関係を打開する呼びかけの内容を詳しく説明しました。

學術懇談会は熱を浴びた議論を展開し、多くの啓発と刺激を受けたと参加者から感想が述べられました。





趙全勝教授は、11月27日（木）午後、青山貴子学長を表敬訪問されました。青山学長は趙教授の本学来訪を心から歓迎すると述べられ、本学の教育改革やキャンパスの国際化推進の現状と展望について紹介し、日中関係の行方について意見交換を行いました。

（了）